



ミラノ通信 28号

発行日 2021年7月16日

発行者 富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

公益社団法人富山県デザイン協会内

TEL. 0766-63-7140

執筆 池田美雪

ミラノ在住デザイナー

ADI DESIGN MUSEUM

- Compasso d'Oro (黄金のコンパス賞)

イタリア国内はやっと、4月末頃からコロナ感染症拡大予防措置が州ごとに徐々に緩和されていき、長らく外出する先もなかった単調な生活から、文化施設やスポーツジムなどの公共的な活動も再開し、心軽やかにメリハリのある生活へと変わりつつあります。

そうした中、5月末には、今年9月5日から10日まで開催されるsupersalone（ミラノサローネのスペシャル版）の記者発表会が、急遽、ミラノトリエンナーレの中庭の澄み切った青空の下で開催され、来場した記者たちが久しぶりの再会を喜び合う中、イタリアンデザインが持つパワーの再出発を世界に向けてアナウンスする絶好の機会が設けられました。その記者発表会の中で、トリエンナーレ館長である建築家Stefano Boeriが語気を強めて紹介したのが、今号のテーマ、ADI DESIGN MUSEUMです。

ミュージアムは、イタリアンデザインを国際的にアピールしていくための重要なデザイン・ハブ施設として、サローネの記者発表会前日の5月25日、Ceresio通り7番地にオープン。ここに至るまでの道のりは、容易ではなかったようです。発案後には、建設用地浄化の徹底作業の取り組みや地域住民からの反発などもあり、時間をかけてこれらの問題を乗り越え、昨年のミラノサローネ開催期間中に仮オープニングを行い、6月には正式に開設する目標を掲げていたにもかかわらず、あいにくコロナ感染症拡大予防措置がとられたために文化施設へも規制がかかり、一年遅れでやっと開館へと到達したのです。

オープニングセレモニーへは、文化・観光大臣Dario Franceschiniを筆頭に、ロンバルディア州知事Fontana、ミラノ市長Salaなど、イタリアの主要産業の一部を担うデザイン界の再出発を祝うために多くの関係者が列席しました。その中でもFranceschiniは「このミュージアムは、歴史上まれに見る不安定なこの時に、デザインの街として世界的に知られるミラノへ発信されたポジティブなメッセージであり、ミラノだけでなく、イタリア共和国にとっても再出発を象徴するものです。また、ミュージアムの役割は、イタリアンデザインの歴史そのものと言えるコンパッソドーロ賞受賞作品コレクションの展示にとどまらず、未来へ向けて若い才能を生み出していくために、時代の変遷に応じるイノベティブな機能を循環させていくことでもあります。」と、このミュージアムの開設がイタリアにとっていかに大切かを語りました。このコメントは、コンパッソドーロ賞が2004年にイタリア文化省より「歴史的および芸術的利益を生む特例の財産」として認定されていること



©MARTINA BONETTI

ADI DESIGN MUSEUMのメインエントランスを囲むファサード。



©MARTINA BONETTI

コンパッソドーロ広場で執り行われた、オープニングセレモニーの様子。

を前提にしています。

ご存知の方も多いと思いますが、ADIは、イタリアで最も古い工業デザイン・アソシエーションです。これまでもミラノ通信の誌面でその活動について触れていますが、コンパッソドーロ賞の誕生までの経緯と併せて後半に紹介させていただきます。

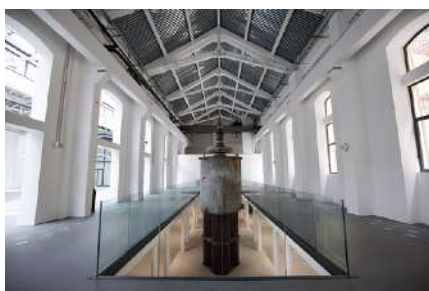
エキシビジョン

ADI DESIGN MUSEUMは、すべてがメイド・イン・イタリア。ミラノ中心地から北へ約2kmほどの距離にあるチャイナタウンとGae Aulenti広場の中程、1930年代建造の元馬力トラムの倉庫と元配電所の2つの建物を再利用しています。地下と地上階から構成された内部に縦長の大きな二つのスペースが設けられ、総面積約5万平米を誇り、高い天井から自然光が差し込む明るくゆったりとした空間です。ミュージアム運営として、パーマネントコレクションの展示と期間限定エキシビジョンを合わせて同時に8つ開催し、互いがデザインを軸としたテーマの中に共通項を見出しながら企画・開催されています。



©ADIDESIGNMUSEUM.ORG

オープニングセレモニーの後に館内を見学するミラノ市長たち。



©MARTINA BONETTI

配電所として使用されていた名残り、蓄電装置は工業遺跡として展示されている。



©MARTINA BONETTI

メインエントランスから明るい館内を眺めたビジョン。

パーマネントコレクションの中でも一番の見どころは、なんと言っても「ADI Design Museum. Il cucchiaino e la città」、約2500点に及ぶコンパッソドーロ受賞作品コレクションです。この展示は、将来の新たな受賞作品へ扉を開き、時代と共に変化することをあらかじめ想定して構成されています。メインエントランスを入ると左手から壁面に沿って、国際的な視点から見てもデザインの歴史を体現している、と言っても過言ではない作品の数々が年代順に展示されています。1954年から現在に至るまで年ごとに受賞作品が一つのボックスにまとめられ、そこには、完成した製品だけでなく、メーカーや技術者、あるいは個人から提供された、製造に至るまでの過程を証言するさまざまな貴重な資料も公開され、一つ一つがとても興味深い内容、閲覧にとっても時間がかかります。受賞作品を世界へ伝える重要な役割を担う建築・デザイン雑誌の記事も、それらの証言の一つ。このような貴重な資料はこれまでバラバラに所有されていましたが、ADI財団のリサーチの成果として、現在1万点が一つに集められ保存されているそうです。それぞれの年から象徴的な作品を一点選び出し、計28点の作品のテーマを掘り下げて詳細な解説が行われているのも、時代ごとの特徴を知るのに良い手がかりです。



©MARTINA BONETTI

1970年に受賞した、AFRA SCARPAとTOBIA SCARPAデザインのソファーSORIANAとその他の受賞作品の展示空間。



©MARTINA BONETTI

20世紀の巨匠ヘオマージュを捧げるポスター展。ルネッサンス時代の図書館の書見台にインスパイアされた展示デザイン。



©ADIDESIGNMUSEUM.ORG

「UNO A UNO. LA SPECIE DEGLI OGGETTI」の展示作品、フェラーリとフィアット500。 Milano Tsushin n.28 - P 02

もう一つの興味深いパーマネントコレクションは、「Manifesto alla Carriera. Omaggio della grafica italiana ai Maestri del Compasso d'Oro」と題されたポスター展。工業デザイン、グラフィック、建築の分野で、今、私たちが語り続けている、20世紀に名を刻んだイタリアの天才たちが作り上げた素晴らしい遺産を称賛すると同時に、企業、団体、デザイナー、製品などコンパッソドーロ・キャリア賞を受賞した139作品へオマージュを捧げています。ADI DESIGN INDEXに選ばれたクリエイター、ベテランクリエイター、そして若手がそれぞれのキャリア賞へ、グラフィックデザイン、イラスト、コラージュ、タイポグラフィなどを介して思い思いに敬意を視覚的に表現し、その中で、前世紀と今世紀の2つの創造力が一つになるという面白さが浮かび上がります。ルネッサンス時代の図書館で使われていた書見台をモデルにした優しい展示デザインや、多くの人が自宅でイタリアンデザインに触れることができるように、とポスターを持ち帰ることができるシステムも心躍らされるアイデアです。

期間限定エキシビションの中でも、ADI DESIGN MUSEUMでしか味わえない魅力を放つのは、キュレーターBeppe Finessiによる「Uno a Uno. La specie degli oggetti」。この展示は、コンパッソドーロ賞コレクションをより深く理解するために、驚くべき切り口で構成されています。時代が隔たる異なる作者によって作られた家具や食器などの工業製品の受賞作品を、カテゴリーごとに二点一組で比較。そこから、時を経ても変わらないモノの本質、あるいは消費者層の好みや社会的背景、新技術の開発から生まれたデザイン要素の変遷を、オリジナル作品の展示によって瞬時に感じ取ることができるのです。圧巻なのは、フェラーリ車や家具の傑作など。頭にしっかりと描かれていたはずの数十年前のデザインが、近年に製作されたデザインのそばで明確に姿を現わし、その違いを見つめるうちにとても強い吸引力で引き込まれる展示です。



©MARTINA BONETTI

エントランスの前に設置された、黄金比をテーマにしたインスタレーション、MISURARE IL MONDO。



©MARTINA BONETTI

ADI財団の創設者の一人で初代会長でもあった、企業家GIULIO CASTELLIへオマージュを捧げたエキシビション。



©MARTINA BONETTI

JUNIOR DESIGN LABの空間。



©ADIDESIGNMUSEUM.ORG

出版社ELECTAが企画・運営する、カフェに隣接したOFFICINA DESIGN SHOP。

国際的にデザイン文化の価値を広める活動へ貢献することを目的にしたミュージアムは、単なる展示だけでなく、新しい文化的複合施設として機能します。それらは、キュレーターチームが多様性のある視点からプログラムを継続的に更新し、Design for Allの基準に基づきすべての人に開かれたミュージアムとして、一つのスペース内で展示とサービスを有機的に共存させ実現されています。シンポジウムやカンファレンスを開催し、より多くの人たちとデザイン文化についてディスカッションを行うこともその一つ。また、小中学生を対象に「Junior Design Lab」デザイン工房を運営し、エキシビションと結びつけたテーマを通して、考え、計画し、作

り出す力を発見し、手作業からデザインの基礎を学び、デザインへ親しみを持つことができる機会を提供します。地域との交流や貢献も重視し、学生や近隣の子供たちは入場無料、また、エキシビジョンを見なくても、カフェ&ライブラリースペースで読書をしながら時間を過ごす、あるいはビジネスの打ち合わせをするスペースとしても活用できます。二つの通りに挟まれた建物は、コンパッソドーロ広場からBramante通りへ通り抜けることができ、一般人もデザインに触れながら行き交いができる、デザイン通りとして親しまれることでしょう。

また、入館チケットの販売、ミュージアム入館、新企画情報の継続的な発信を一つのアプリにまとめ、イタリアで初のデジタルチケットのみのミュージアム入館を実現。今年2月に発足したドラギ新政権の3つの柱の内の2つ「国のデジタル化」と「若者への投資」を先取りした施設といえます。

ADI DESIGN MUSEUMの詳細は、こちらからご覧ください
www.adidesignmuseum.org

下記リンクより、すべてのコンパッソドーロ賞受賞作品をご覧いただけます
www.adidesignmuseum.org/compasso-doro/archivio-del-compasso-doro

ラ・リナシェンテ百貨店から生まれた世界で初めての工業デザイン賞

戦前から戦後にかけて、フィアット社やオリベッティ社の製品に見られるように、自動車産業を中心とする工業分野でイタリアンデザインの傑作が生まれています。それに追随するように、家具や照明器具、グラフィック、ファッションと、デザインの裾野が広がっていきました。

そうしたデザインの潮流の中核を成したのは、当時、多くの優れたクリエイターを抱えていたラ・リナシェンテ百貨店です。百貨店は、1865年に洋服生地と既製紳士服を販売する職人工房「ボッコーニ兄弟商店」として、ミラノのドゥオーモ広場のそば、Santa Radegonda通りへ開業し、その後兄弟は1877年に広場に面したConfortableホテルを買い取り、イタリア初の百貨店Aux Villes d'Italieをオープンします。全国に数店舗の百貨店と大型販売店Upimのチェーン展開を成し遂げた後、1917年に事業を売り渡し、Gabriele D'Annunzioの命名によりラ・リナシェンテ百貨店となりますが、オープンした数日後に残念ながら火災に見舞われ、1921年に以前よりも広い建物が同じ場所へ再建されます。

新しいオーナーSenatore Borlettiは、第一次世界大戦の最中に誕生しつつあったブルジョワ階級をターゲットに、彼らが憧れを抱く百貨店にするためのイメージづくりを行い、これを機会に、芸術を日常生活へ近づけ、実用性の高い衛生的でセンスの良い家具と日用品の新しい形式を生み出し、それらをより幅広い層へ提案することで、時代の先を行く会社へと変換させる方針を決めました。

こうした流れの中で、1927年に住宅のしつらえや家具のイメージを一新する、シンプルでエレガントなデザインの現代的なファニチャーDomus Novaシリーズを発表します。このシリーズは、その数年前から陶磁器メーカーRichard Ginoriと手を組みカラフルな食器のデザインを始め、その翌年にデザイン建築雑誌Domusを創刊すること



1927年に、GIO PONTIとEMILIO LANCIAがデザインした、DOMUS NOVAシリーズの中の「ダイニングルーム」と「娘の部屋」。

になるイタリアンデザインの父Gio PontiがEmilio Lanciaと共に手掛け、それらの作品はミラノの北にあるモンツァ市で開催された、第三回モンツァビエンナーレに出展されました。当時の大きなデザイン運動バウハウスが提唱していた、理性に基づくデザインと完全に切り離された、イタリア独自のデザインがここで誕生したのです。

また、この頃から百貨店はイタリア製品、特にレーヨン、人工ウールやカフィヨック（ヘンプ混繊維）など、当時は画期的だった合成素材を使った服飾製品を数多くリリース。その背景には、ローマやフィレンツェなど全国に展開する店舗で、消費者とのダイレクトなコンタクトを図ることで消費者のニーズを分析し、イタリア工業製品の評価・推進を進めるという、需要と供給の好循環の誕生がありました。個人消費に向けた広告ポスターの制作には、1956年まで画家のAldo Mazzaが携わっています。1943年、大戦によりミラノ本店の建物が爆撃され、1950年に現在の形でオープンしました。このオープニングに合わせ、グラフィックデザイナーMax Huberが制作したIR（La Rinascenteの2つの頭文字を合わせた）ロゴは、現在でも使われています。

こうして大手販売業の中で圧倒的な地位を築き上げ、イタリア経済が構造再編され消費がぐんぐんと伸びていった戦後は、製品開発とコミュニケーションにおけるリーダー的役割を担ったのです。40年代の終わりには、オリベッティ社がすでに1928年から取り入れていた形式を倣い、アートディレクション部門を社内に設立。ここでは、イメージ、コミュニケーション、新店舗の設計、サービスシステム、ラ・リナシェンテ百貨店の商標入り製品の開発が行われていました。その後20年の間に、ラ・リナシェンテ百貨店のクリエイティブオフィスは、グラフィック、デザイン、建築そしてコミュニケーションにおいて、卓越した文化の中心として知られるようになります。そこでは、Marco Zanuso、Alberto Rosselli、Bruno Munari、Gio Pontiをはじめとする当時の最高峰のクリエイターが働いていただけでなく、当時はまだ新人であったItalo Lupi、Mario Belliniもここで育成されたのです。ショーウィンドウとグラフィック広告へは、1955年までAlbe Steinerが携わっています。その後1960年代には、アパレルメーカー・ベネトン社のセンセーショナルな広告写真で世界的に名を広めた写真家、Oliviero Toscaniもここで才能を発揮しています。さらに、イタリアを代表するファッションデザイナーGiorgio Armaniも、兵役を終えた後の20代前半から、百貨店のショーウィンドウを手掛けながら店員としてここで働いていた経験があります。それほど、ラ・リナシェンテ百貨店は国内外を魅了する存在だったのです。百貨店はビジュアルコミュニケーションへ力を注ぎ、単に商品をアピールするのではなく、それらを通して新しいライフスタイルをプロモートしていくという、メディア戦略の点でもとても先駆的な存在でした。

1951年に開催された第九回ミラノトリエンナーレでは、「Forma dell'utile（役立つ形）」をテーマに、Carlo Paganiがデザインした4人家族のための住宅、そしてFranco Albiniがデザインした家具のコレクションを発表しています。これらを背景に、ラ・リナシェンテ百貨店は、すべての日用品の美しさと文化の価値を確認する新製品の展示会「L'estetica del prodotto（製品



©ARCHIVES.RINASCENTE.IT

レーヨン製品の広告 - 1929年



©ARCHIVES.RINASCENTE.IT

Max Huber制作のロゴ - 1950年

の美学)」を発案し、1953年に実現しました。この展覧会の大成功が、いよいよコンパッソドーロ賞の誕生へ大きな拍車をかけることになります。

ラ・リナシェンテ百貨店の詳細は、こちらからご覧ください
archives.rinascente.it/it/paths/la-rinascente-1865-2017-storia-del-grande-magazzino

ラ・リナシェンテ百貨店のビジュアルコミュニケーションデザインは、こちらからご覧いただけます
archives.rinascente.it/it/paths/graphic-design-and-visual-communication

Gio PontiとAlberto Rosselliは、経済発展と世界各国でのイタリア文化振興の大切な素材となるイタリアンデザインを推進するために、工業デザインに与えられる世界で初めての賞を発案します。百貨店の社長Umberto Burzioの息子も、製品の文化的価値を高め、品質とデザインを目標とするメーカーの成長と誕生に対する刺激になると考え、賞を立ち上げる決意をしたのです。

賞の名前とロゴは、Albe Steinerが会議中にポケットから取り出したコンパスからヒントを得たと言われています。そのコンパスは、完璧な美しいプロポーションに秘められる黄金比を描くために、1893年にAdalbert Goeringerが発明した用具でした。こうして、Compasso d'Oro（黄金のコンパス）賞と名前が決まり、賞の盾へもMarco ZanusoとAlberto Rosselliがコンパスを描き出します。

1954年第一回目の受賞作品は15点。その中でも特に有名なのは、Bruno MunariがPirelli-Pigomma社で開発された新素材ポリウレタンを実験的に用いた玩具、茶色のお猿さん「zizi」でしょう。その他に、時代を反映して、タイプライターやミシン、家具のデザインなどが受賞しています。これらの受賞作品は、第十回ミラノトリエンナーレへ展示されました。発足後4年間、受賞作品の選考が毎年行われていたことが、デザインを取り巻く環境の熱気を物語っています。



©WWW.ADI-DESIGN.ORG

受賞者へ与えられる、現在のコンパッソドーロ賞。

ADI - Associazione per il Disegno Industrialeの設立

コンパッソドーロ賞創設の2年後、1956年に、プロジェクト・販売網・消費・育成などのデザインに関連するテーマを中心に、設計者（建築家・デザイナー）、企業、研究者、教育者、批評家、ジャーナリストが一つに集まる非営利の工業デザイン・アソシエーション「ADI」が設立されました。目的は、より適切な条件でデザインやサービスの設計を行なうために役に立つさまざまな貢献を、実行に移すことでした。建築家、デザイナー、企業から構成されるグループの中から湧いて出た案だったのですが、彼らは工業デザインとそこから生まれる製品を専門の分野として定義する必要性に駆られていたのです。アソシエーションの初代会長は、Gio Ponteと共にコンパッソドーロ賞を創設したAlberto Rosselliです。

1958年、ラ・リナシェンテ百貨店は、この生まれて間もない団体へコンパッソドーロ賞の企画・運営を任せ、協賛会社として名を連ねました。その後、1964年には全面的にADIへ譲渡し活動から退きましたが、時間をかけて築いてきたさまざまな協力関係が



©WWW.ADI-DESIGN.ORG

イタリア全国から選ばれたデザインを掲載するADI DESIGN INDEX。

ら、現在、ADI DESIGN MUSEUMのメインスポンサーとして、活動をサポートしています。

ADIは、現在約千名の会員から構成されており、ディスカッションを通じてデザイン振興活動を推し進めつつ、3年に1度開催されるコンパッソドーロ賞の企画・運営を行っています。その中で一般にも知られているのが、ADI DESIGN INDEXシステムです。ミラノ本部とイタリア全土で活動する委員たちにより構成された組織が、毎年、国内で製品化されるデザインをつぶさに検証し、INDEX（印刷本とデジタル版）へ掲載する作品を選考します。このINDEXへ掲載された作品だけが、コンパッソドーロ賞の選考対象作品になります。カバーする領域は、さまざまなカテゴリーの工業デザイン製品、製品システム、サービス、製造プロセスと企業に関するリサーチ、理論的・批評的なリサーチ、社会的に有益なイニシアチブ、と多岐に渡っています。工業デザイン製品については、適切な製造プロセス、適切な素材の活用、統合的にまとまった形状に対し、独自性を持ち、機能的にも分類学的にもイノベーティブな優れたデザインが選ばれます。さらに、環境への配慮、公共的かつ社会的な価値、使いやすさと相互作用、そしてすべての人へのデザイン、これらに対する考慮を示す製品が特に注目されます。

2001年には、「イタリアンデザインのためのADI財団」が設立されました。この財団は、個人、社会、環境に対する倫理を尊重したサステナブルなデザインを保証することに特に力を注ぎながら、デザイン文化の保護と普及、そして歴史的遺産と未来への展望に対するプロモーション活動をミッションとします。主な活動は、ADIから譲り受けた、ADI DESIGN INDEXとコンパッソドーロ賞歴代受賞作品コレクションの保存、そしてそれらに関連する歴史的な資料のリサーチやエキシビションを通じて普及に努めることです。

ADIの詳細は、こちらからご覧ください

www.adi-design.org



ADI Design Museum
Compasso d'Oro

いかがでしたか？ミラノに来られる方は、ぜひ、ゆっくりと館内で時を過ごしてみてください。これまで知らなかったイタリアンデザインの隠れた魅力にきっと驚かれるはずです。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー 武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikedada.it